

1930年前後の都市における色彩環境

——色彩感覚の近代化——

小林 忠 雄

-
- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 生活環境の近代化 | 4. 都市における色彩感覚の変容 |
| 2. 民俗における色彩認識 | 5. 都市が生成した色彩感覚 |
| 3. 1930年前後の色彩資料データ | 6. 五色のハレ感覚と七色の近代感覚 |
-

論文要旨

本稿は日本の民俗的な色彩感覚が、明治末期から昭和初期の間に変容したという問題意識を前提に論じたものである。それは、主として新たに近代化された都市社会の出現と呼応しており、その背景には西洋文化や知識の移入による影響があるものと考えられる。

ちなみに、まず日本の民俗感覚としての色彩認識については、一つには色名などを使った言語文化における認識と、もう一つは多様な色彩の材料を駆使して表現された物質文化における認識のあり方が考えられ、そのなかで基層感覚と覚しき部分について概説し、感覚の近代化とは何かについて問題提起した。

つづいて、都市における色彩を具体的に示した文献として、『近代庶民生活誌』全10巻、および今和次郎『モデルノロジオ（考現学）』をとりあげ、そのなかから色彩語彙に関係した箇所、約400項目を抽出し、色彩ごとに分類し並べてみた。

その結果、1930年前後において、東京や大阪といった大都市における人々の色彩の捉え方が微妙に変容していることが分かった。その変容については、とりあえず赤・青・白・黒・紫の各色についてのみ、何がどのように変わったのかについて分析してみた。

同じく、変容には都市のなかで新たに出現した色彩傾向がある。それは黄・緑・ピンクといった人工色であって、さらに赤・青・紫の色の組合せ現象にも注目された。

そして、近世まで都市において顕著であった五色のハレ（晴れ）感覚から、近代においては七色という、これまで識別されていなかった光のスペクトル感覚による色の認識が立ち表れ、庶民の色彩認識に大きな変革がなされたとみられる。

本稿は、そのような変容の要素を、都市が生成した民俗という視点から捉え、次に何かが言えないだろうかという、今後の民俗研究への指針を求めた、あくまで実験的な試みである。